

聖

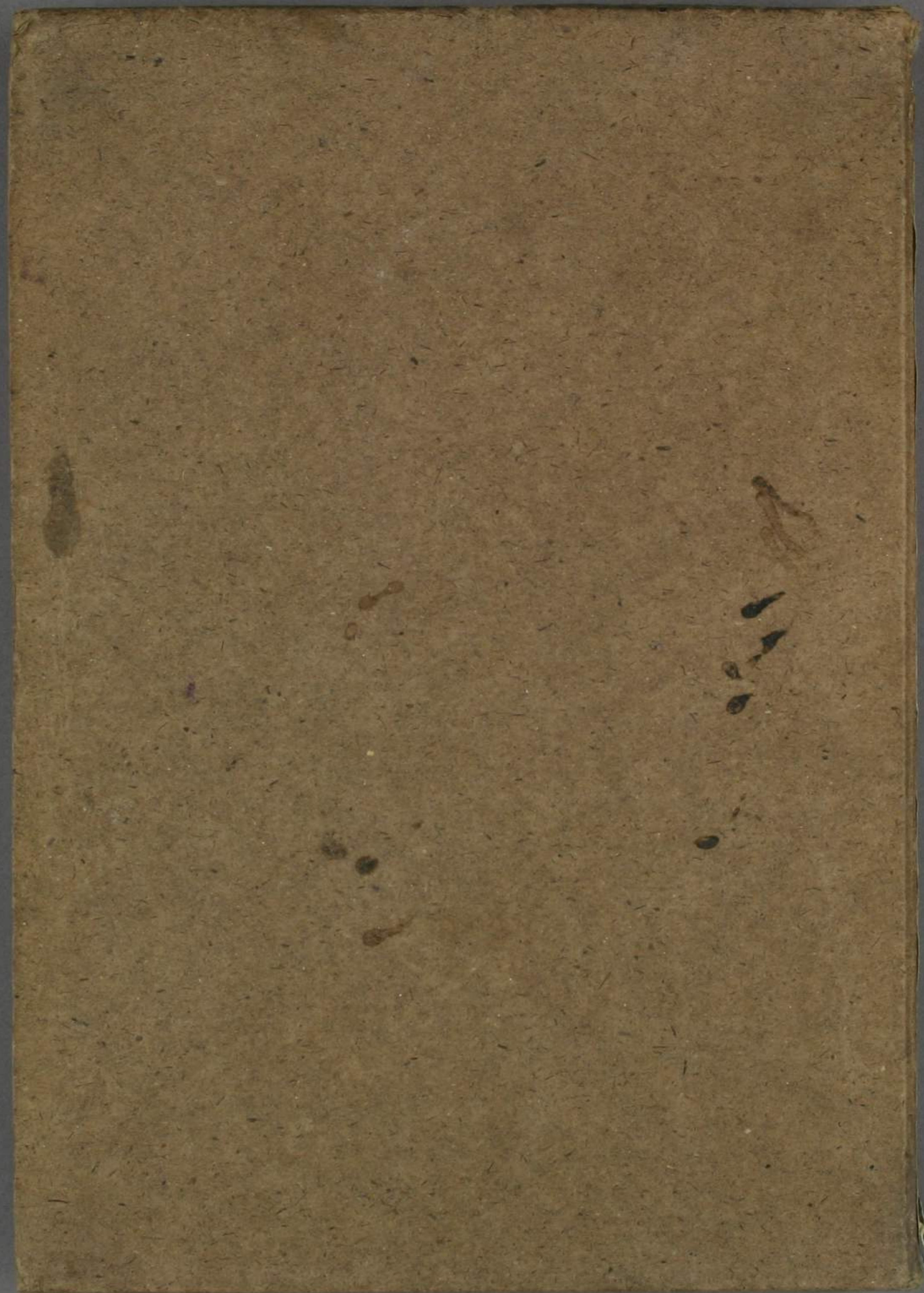
暮鳥詩
茅錢画

小方書院版

雲

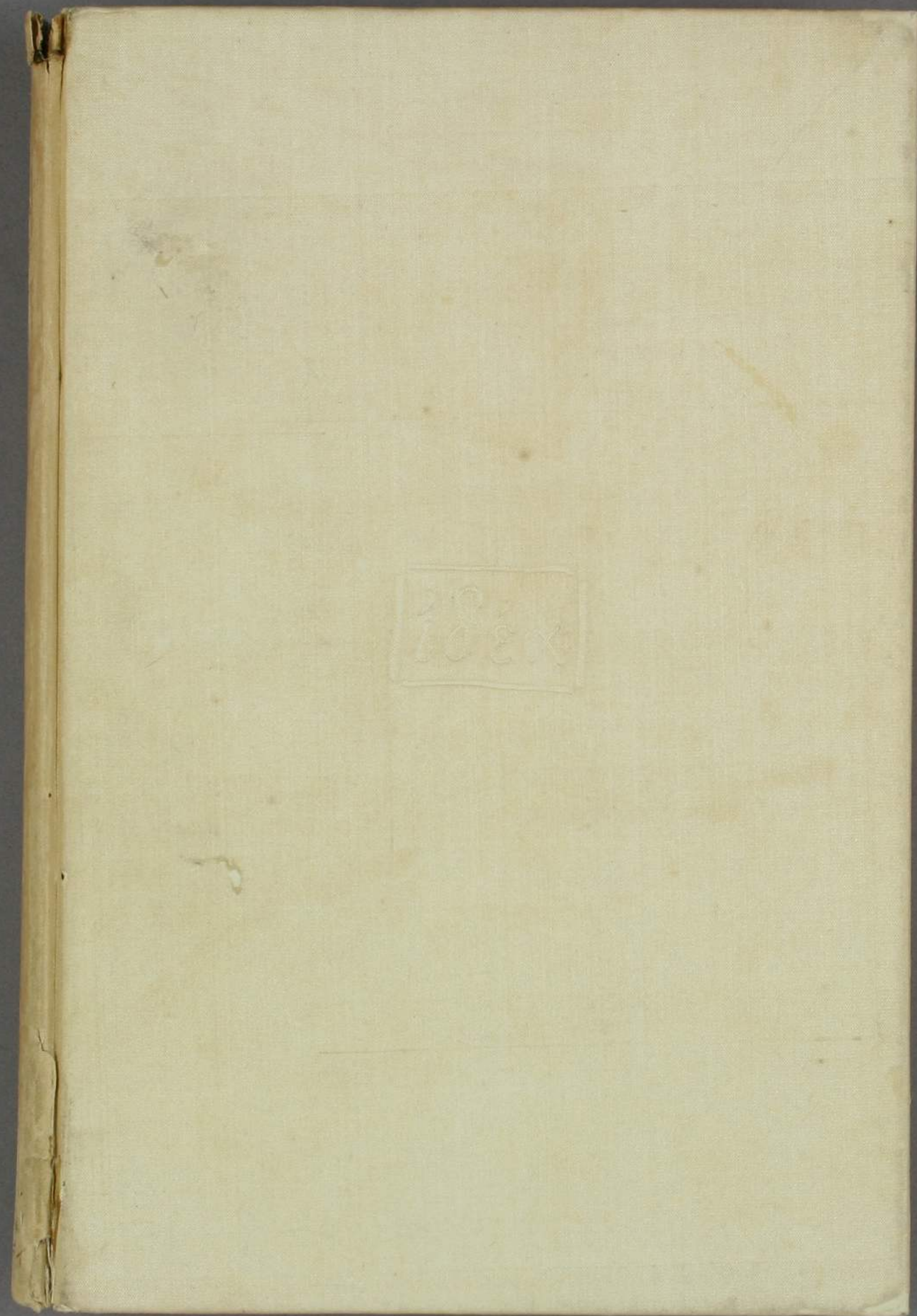
山村暮鳥詩集

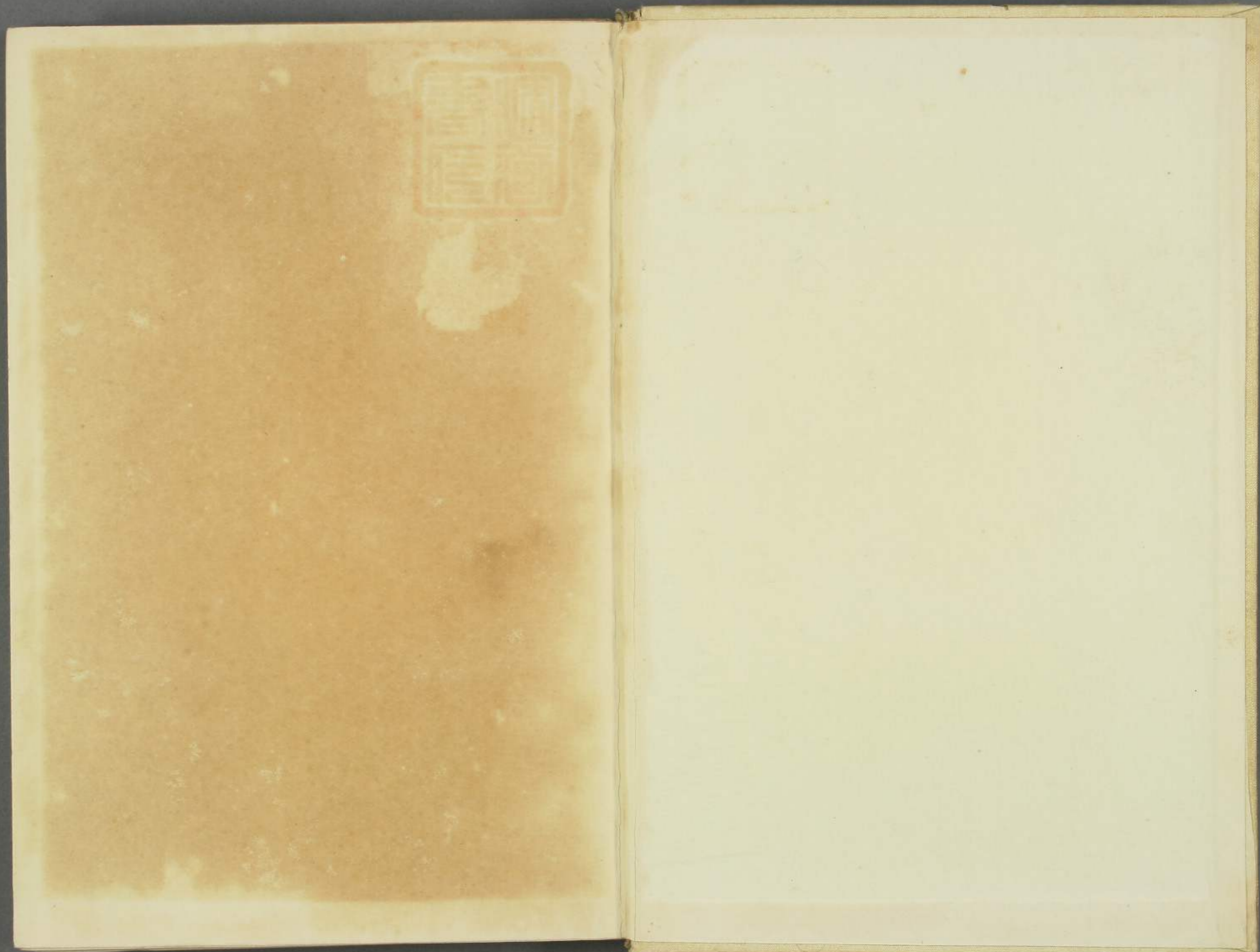
書





山本 為
院書アテ





卷之二



裝
幀

小
川
芋
錢

序

人生の大きな峠を、また一つ自分ほうしるにした。十年一昔だといふ。すると自分の生れたことはもうむかしの、むかしの、むかしの、そのまた昔の事である。まだ、すべてが昨日今日のようにばかりおもはれてゐるのに、いつのまにそんなにすぎさつてしまつたのか。一生とは、こんな短いものだらうか。これでよいのか。だが、それだからのちは貴いのであらう。

そこに永遠を思慕するものの寂しさがある。

2

ふりかへつてみると、自分もたくさん詩をかいてきた。よくかうして書きつづけてきたものだ。その詩が、よし、どんなものであらうと、この一すぢにつながる境涯をおもへば、まことに、まことに、それはいたづらごとではない。

むかしより、ふでをもてあそぶ人多くは、花に耽りて實をそこなひ、實をこのみて風流をわする。

これは芭蕉が感想の一つであるが、ほんとうにそのとほりだ。

また言ふ。——花を愛すべし。實なほ喰ひつべし。

なんといふ童心めいた慾張りの、だがまた、これほど深い實在自然の聲があらうか。

自分にも此の頃になつて、ようやく、そうしたことか泌々と思ひあはされるやうになつた。齡の效かもしれない。

藝術のない生活はたえられない。生活のない藝術もた

3

えられない。藝術か生活か。徹底は、そのどつちかを書
ばせずにはおかない。而も自分にとつては二つながら、
どちらも棄てることができない。

4

これまでの自分には、そこに大きな悩みがあつた。

それならなんぢのいまはと問はれたら、どうしよう、

かの道元の谿聲山色はあまりにも幽遠である。

かうしてそれを喰べるにあたつて、大地の中からこ
げでた馬鈴薯をただ合掌禮拜するだけの自分である。

詩が書けなくなればなるほど、いよいよ、詩人は詩人

になる。

だんだんと詩が下手になるので、自分はうれしくてた
まらない。

詩をつくるより田を作れといふ。よい箴言である。け
れど、それだけのことである。

善い詩人は詩をかざらず。

まことの農夫は、田に溺れず。

これは田と詩ではない。詩と田ではない。田の詩ではない。詩の田ではない。詩が田ではない。田が詩ではない。田も詩ではない。詩も田ではない。なんといはう。實に、田の田である。詩の詩である。

—藝術は表現であるといはれる。それはそれでいい。だが、ほんとうの藝術はそれだけではない。そこには、表現されたもの以外に何かがなくはならない。これが大切な一事である。何か。すなはち宗教において愛や眞

實の行爲に相對するところの信念で、それが何であるかは、信念の本質におけるとおなじく、はつきりとはいへない。それをある目的とか寓意とかに解されてはたいへんである。そのみが藝術をして眞に藝術たらしめるものである。

藝術における氣稟の有無は、ひとへにそこにある。作品が全然或る叙述、表現にをはつてゐるか否か、は徹頭徹尾、その何かの上に關はる。

その妖怪を逃がすな。

それは、だが長い藝術道の體驗においてでなくては捕

へられないものらしい。

何よりもよい生活のことである。寂しくともくるしくともそのよい生活を生かすためには、お互ひ、精進々々の事。

茨城県イツハマにて

山村暮鳥

目次

春の河	………	一
おなじく	………	三
おなじく	………	五
蝶々	………	六
おなじく	………	七
野良道	………	九
おなじく	………	二
おなじく	………	三

櫻	...	102
おなじく	...	110
お爺さん	...	111
ある時	...	113
ある時	...	112
ある時	...	114
ある時	...	114
朝	...	117
藤の花	...	118
ある時	...	111
ある時	...	111
ある時	...	112

ある時	...	116
野糞先生	...	116
手	...	113
ほうほう鳥	...	111
まつぼっくり	...	117
讀經	...	116
蚊柱	...	115
ある時	...	115
ある時	...	114
ある時	...	114
ある時	...	112



ウラカ
子あし

春の河

たつぷりと

春の河は

ながれてゐるのか

ゐないのか

ういてゐる

藁くすのうごくので

それとしられる

おなじく

春の、田舎の
大きな河をみるよるこび
そのよるこびを
ゆつたりと雲のように
ほがらかに
飽かすながして

それをまたよるこんでみてゐる

おなじく

たつぷりと
春は
小さな川々まで
あふれてゐる
あふれてゐる

蝶々

ふかい
ふかい
なんともいへず
此處はどこだらう
あ、蝶々

おなじく

青空たかく
たかく
どこまでもどこまでも
舞ひあがつていつた蝶々
あの二つの蝶々
あれつきり

もうかへつては來なかつたか

野良道

こちらむけ
娘達
野良道はいいなあ
花かんざしもいいなあ
麥の穂がでそろつた
ひよいと

ふりむかれたら
まぶしいだらう
大かい落つ葉をかぶつて
なんともいへずいいなあ

おなじく

野良道で
農婦と農婦とゆきあつて
たちばなししてゐる
どつちもまけずに凸凹な顔をし
でつかい荷物を
ひとりのは南京袋

もひとりののはあかんぼ
そのうへ
天氣がすばらしくいいので
二人ともこのうへもなく幸福そうだ
げらげらわらつたりしてゐる

おなじく

そこらに
みそさざいのような
口笛をふくものが
かくれてゐるよ
なあんだ
あんな遠くの桑畑に

なんだか、ちらり
見えたりかくれたりしてゐるんだ

おなじく

ぼつかりと童子は
ほんとに花でもさいたようだ
ねむてえだすら
雲雀が四方八方で
十六十七
十六十七

といつてさえづつてゐる
野良道である
なにゆつてるだあ
としよりもにつこりとして
たんぼぼなんか
こつそりとみてゐる

雲

丘の上で
としよりと
こどもと
うつとりと雲を
ながめてゐる

おなじく

お、う、い、雲、よ、
ゆ、う、ゆ、う、と、
馬、鹿、に、の、ん、き、そ、う、ぢ、や、な、い、か、
ど、こ、ま、で、ゆ、く、ん、だ、
す、つ、と、磐、城、平、の、方、ま、で、ゆ、く、ん、か、

ある時

雲、も、ま、た、自、分、の、よ、う、だ、
自、分、の、よ、う、に、
す、つ、か、り、途、方、に、く、れ、て、ゐ、る、の、だ、
あ、ま、り、に、あ、ま、り、に、ひ、ろ、す、ぎ、る、
涯、の、な、い、蒼、空、な、の、で、
お、う、老、子、よ、

山には躰躰が
さいてゐるから
おつちるなら
そこだらうと
子どもがいつて
かみなり

こども

ひよつこりて
にここし
こんなときだ
ひよつこりて
きませんか

躑躅が、い、い、ち、や、な、い、か、
か、み、な、り、

おなじく

おや、こどもの聲がする
家のこどもの泣聲だよ
ほんとに
あんまり長閑^{のど}なので
どこかといとほい
お伽噺の國からでもつたはつてくるようにきこ

える
いい聲だよ、ほんとに

おなじく

ぼさぼさの
生籬の上である
牡丹でもさいてゐるのかと
おもつたら
まあ、こどもが
わらつてゐたんだよ

おなじく

千草ちぐさの嘘うそつきさん
とうちやんの
おくちから
蝶々ちょうちょうが
飛んでつた、なんて

おなじく

とろとろと腫は々
とろけかかつたその腫々
ねむたかる
子どもよ
さあ林檎だ、林檎だ
まつ赤な奴だぞ

おなじく

まづしさのなかで
生ひそだつもの
すくすくと
ほんとに筍のようだ
子どもらばかり

おなじく

こどもよ、こどもよ
焼けたら宙に放りあげろ
とうもろこしは
風で味よくしてたべろ
風で味つけ
よく噛んでたべろ

おなじく

まんまろく
まんまろく
どうやら西瓜ほどの大きさである
だが子どもは呟った
お月さんは
美味^{うまい}そうでもねえなあ

おなじく

こどもはいふ
たくさん頭^{あたま}顛^{たもと}を
叩^{たた}かれたから
それで
大人^{おとな}は恻^{あはれ}巧^{たくま}になつたんだね

おなじく

篠、竹、一、本、つ、つ、た、て、て、
こ、ど、も、が、
家、の、ま、は、り、を、
駈、け、ま、は、つ、て、ゐ、る、
ゆ、ゆ、ふ、ふ、や、や、け、け、だ、だ、

おなじく

こどもが
なき、なき
かへつてきたよ
どうしたのかときいたら
風めに
ころばされたんだって

おう、よしよし
こんどとうちやんがとつつかまへて
ひどい目にあはせてやるから

馬

たつぷりと
水をたえた
田んぼだ
代かき馬がたのくるで
げんげの花を食べてる

おなじく

馬が水にたつてゐる
馬が水をながめてゐる
馬の顔がうつつてゐる

おなじく

だ、あ、れ、も、ゐ、な、い、
馬、が、
水、の、匂、ひ、を、
か、い、で、ゐ、る、

二、一、か、瞬、
日、り、う、間、
頃、ん、も、と、
の、の、た、は、
月、朝、ふ、
が、顔、と、
で、よ、い、
て、も、
ゐ、の、
る、で、
あ、
ら、
う、
か、

朝
顔

あ、洗、か、こ、そ、馬、
螢、つ、ら、ど、ん、よ、
だ、て、だ、も、な、お、
、も、ら、ま、の、お、ほ、
、つ、で、の、ほ、き、
、て、ゐ、う、な、り、
、る、ん、に、な、り、
、か、か、を、し、
、て、

ゆ
ふ
が
た

おなじく

芭蕉はともかくも

火をこしらへて

茶をいれた

それからおもひだしたように

かたはらのお櫃を覗いてみて

さびしくほほゑみ

その茶をざぶりぶつかけて

さらさらと

冷飯を食べた

朝顔よ

そうだったらう

渠みちには、妻も子もなかつた

おなじく

まんづ、まんづ

この餓鬼奴はどしたもんだべ

脊中で

おつかねえようだよ

朝顔の花喰ひたがつてるだあよ

驟雨

沼の上を

驟雨がとほる

そのすつとたかいところでは

雲雀が一つさえづつてゐる

ぐつつら

ぐつつら

馬鈴薯が煮えたつた

おなじく

驟雨は
ぐつしよりとぬらした
馬もうまかたも
おんなじように

病牀の詩

朝である

一つ一つの水玉が

葉末葉末にひかつてゐる

ところをこめて

ああ、勿體なし

そのひとつつびとつよ

おなじく

よくよくみると
その腫の中には
黄金きんの小さな阿彌陀様が
ちらちらうつつてゐるようだ
玲子よ
千草よ

とうちやんと呼んでくれるか
自分は耻ぢる

おなじく

ああ、もつたいなし

もつたいなし

けさもまた粥をいただき

朝顔の花をながめる

妻よ

生きながらへねばならぬことを

自分にはつきりとおもふ

おなじく

ああ、もつたいなし
もつたいなし
森閑として
こぼれる松の葉
くもの巢にひつかかった
その一つ二つよ

おなじく

ああ、もつたいなし
かうして生きてゐることの
松風よ
まひるの月よ

おなじく

ああもつたいなし

もつたいなし

蟋蟀きりぎりすよ

おまへまで

ねむらないで

この夜ふけを

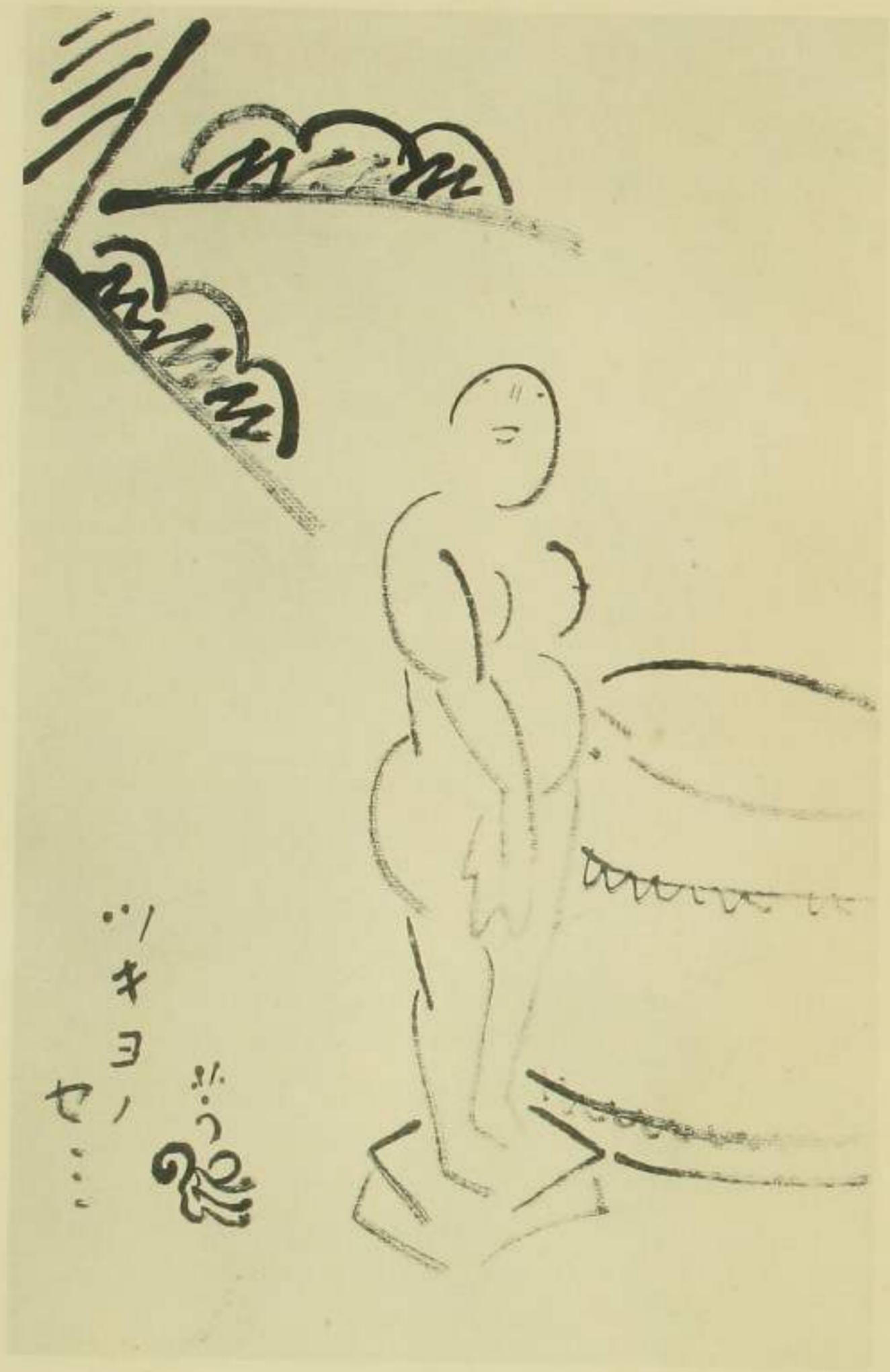
わたしのために啼いて
かててくれるのか

おなじく

ああ、もつたいなし
もつたいなし
かうして
寝ながらにして
月をみるとは

おなじく

ああ、もつたいなし
もつたいなし
妻よ
びんぼうだからこそ
こない月もみられる



月

ほつかりと
月がでた
丘の上をのつそりのつそり
だれだらう、あるいてゐるぞ

おなじく

脚^たもとも

あたまのうへも

遠い

遠い

月の夜ふけな

おなじく

一ところ明るいのは

ぼたんであらう

そうだ

ぼたんだ

星の月夜の

夜ふけだつたな

おなじく

靄深いから

とほいような

ちかいような

月明りだ

なんの木の花だらう

おなじく

竹林の

ふかい夜霧だ

遠い野茨のほひもする

どこかに

あるからだらう

月がよ

おなじく

月の光にほけたのか
蟬が一つ

まあ、まあ

この松の梢は
花盛りのようだ

おなじく

こしまき一つで

だきかかえられて

ごろんと

大かい西瓜はうれしかる

その手もとが

ことさらに

月で明るいよう

おなじく

月の夜をしよんぼりと
影のはうが
どうみても
ほんものである

おなじく

漁師三人

三體佛

海にむかつてたつてゐる

なにか

はなしてゐるようだが

あんまりほのかな月なので

ききとれない

おなじく

くれがたの庭掃除
それがすむのをまつてゐたのか
すぐうしろに
月は音もなく
のつそりとでてゐた

西瓜の詩

農家のまひるは
ひつそりと
西瓜のるすばんだ
大かい奴がごろんと一つ
座敷のまんなかにかががつてゐる
おい、泥棒がへえるぞ

わたしが西瓜だつたら
どうして噴出さすにゐられたらう

おなじく

座敷のまんなかに
西瓜が一つ
畑のつもりで
ころがつてる

びんぼうだと呟ふか

おなじく

かうして一しよに

裸まらばだ體でごろごろ

ねころがつたりしてゐると

おまへもまた

家族のひとりだ

西瓜よ

なんとか言つたらよかんべ

おなじく

どうも不思議で
たまらない
叩かれると
西瓜め
ぼこぼこといふ

おなじく

みんな
あつまれ
あつまれ
西瓜をまんかにして
そのまはりに

さあ、合掌しろ

おなじく

みんな
あつまれ
あつまれ
そしてぐるりと
輪を描け
いま

真二つになる西瓜だ

飴賣爺

あめうり爺さん
ちんから
ちんから
草鞋脚絆で
何といふせわしそうな

おなじく

朝はやくから

ちんから

ちんから

あめうり爺さん

まさか館を賣るのに

生まれてきたのでもあるまいが

なせか、そうばかり
おもはれてならない

おなじく

あめうり爺さん
あんたはわたしが
七つ八つのそのころも
やつぱり
そうしたとしよりで
鉦かねを叩いて

館を賣つてた

おなじく

じいつと鉦を聴きながら
あめうり爺さんの
脊中にとまつて
ああ、一塊ひとかたまりの蠅は
どこまでついてゆくんだらう

二たび病牀にて

わたしが病んで
ねてゐると
木の葉がひらり
一まい舞ひこんできた
しばらくみなかつた
森の

楫の葉だつた

おなじく

わたしが病んで
ねてゐると
蜻蛉とんぼがきてはのぞいてみた
のぞいてみた
朝に夕に
ときどきは晝日中も

きてはのぞいてみていつた

おなじく

蠅もたくさん

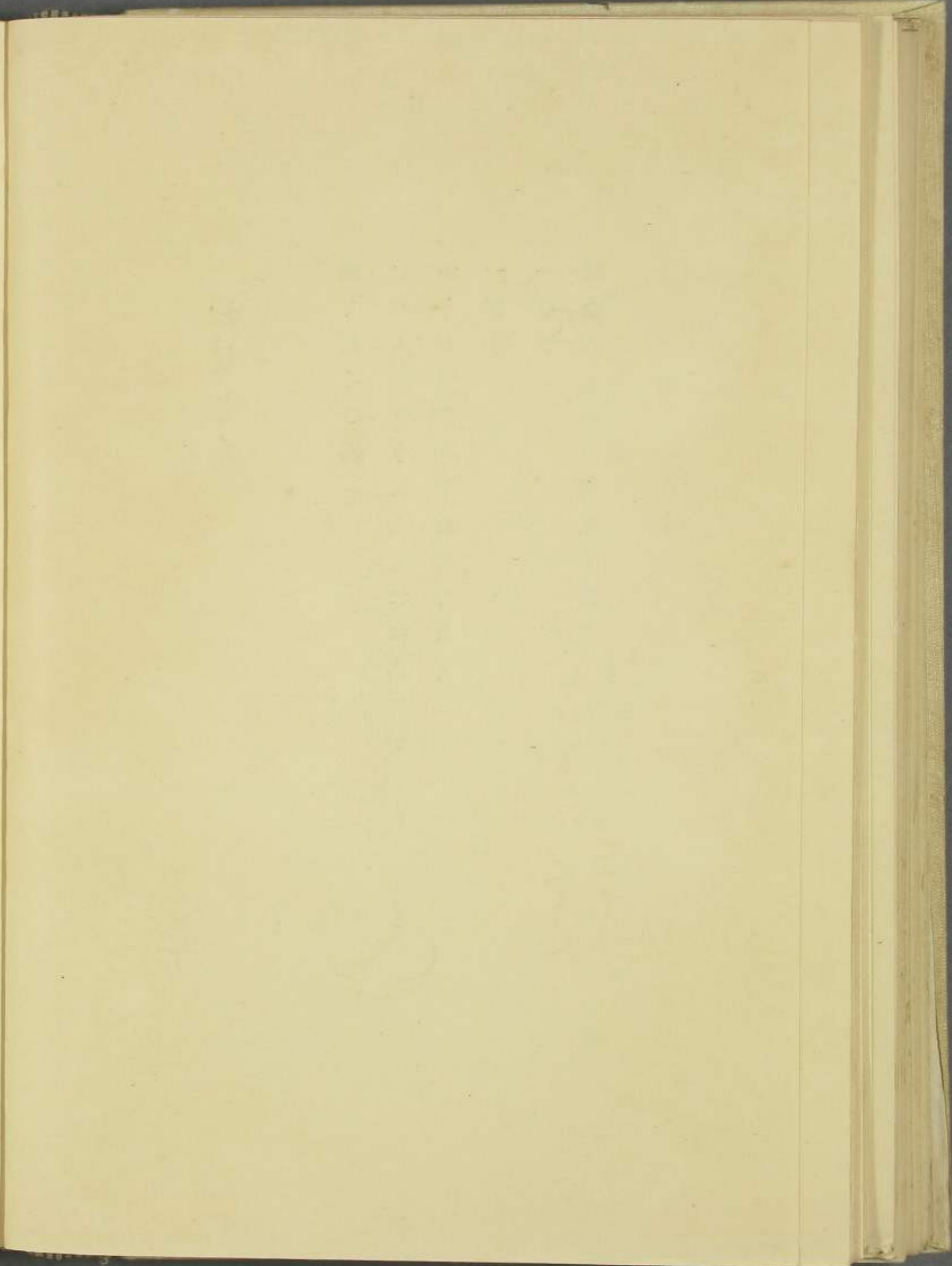
いつものようにゐるにはわたが

かうしてやんでねてゐると

一びき

一びき

馴染のふかい友達である



椎の葉

自分は森に
この一枚の木の葉を
ひろいにきたのではなかつた
おう、椎の葉である

ある時

どこだらう
暮^{ひき}でももあるかな
そら、ぐうぐう
ぐうぐう
ぐうぐう
ほんとにどこだらう

いくら春さきだつて
こんなまつくらな晩ではないか
遠く近く
なあ、なあ、土の聲だのに

ほそぼそと

ほそぼそと

松の梢にかかるもの

煮炊にのけむりよ

あさゆふの

かすみである

こんな老木になつても

こんな老木になつても

春だけはわすれないんだ

御覽よ

まあ、紅梅だよ

梅

ほのかな
深い宵闇である
どこかに
どこかに
梅の木がある

どうだい
星がこぼれるようだ
白梅だらうの
どこに
さいてゐるんだらう

おなじく

梅、し、そ、お、
の、づ、つ、い、
匂、か、と、そ、
ひ、に、つ、と、
だ、

おなじく

大竹簾の真畫は
ひつそりとしてゐる
この梅の
小枝を一つ
もらつてゆきますよ

山逕にて

善い季節になつたので
薊あざみなどまでがもう
みち一ぱいに匍はひだしてゐた
けふ、山みちで
自分はそのばらに
からみつかれて

脛すねをしたたかひつかかれた

ある時

まあ、まあ
どこまで深い霧だらう
そこにもここにも
木が人のようにたつてゐる
あたまのてつぺんでは
繪の音がしてゐる

ぎい、ぎい
そうかとおもつてきいてゐると
雲雀ひばりが一つさえすつてゐる
これでいいのか
春だとはいへ
ああ、すこし幸福すぎて
寂しいような気がする

ある時

麥の畝々までが

もくもく

もくもく

匍ひだしそうにみえる

さあ

どうしよう

ある時

うす濁つたけむりではあるが

一すぢほそぼそとあがつてゐる

たかくたかく

とほくの

とほくの

山かげから

青天あせをめぐけて
けむりにも心があるのか
けふは、まあ
なんとなんといふ静しず穏おだな日だらう

櫻

さくらだといふ
春だといふ
一寸、お待ち
どこかに
泣ないてる人もあらうに

おなじく

馬鹿にならねば
ほんとに春にはあへないそうだ
笛よ、太鼓よ
さくらをよそに
だれだらう
月なんか見てゐる

お爺さん

満開の桃の小枝を
とろりとした目で眺めながら
うれしそうにもつてとほつた
あのお爺さん
にこにこするたんびに
花のはうでもうれしいのか

ひらひらとその花^{はな}瓣^{びら}をちらした
あのお爺さん
どこかで見たとような

ある時

あらしだ
あらしだ
花よ、みんな蝶々にでもなつて
舞ひたつてしまはないか

ある時

自、分、は、き、い、た、
朝、霧、の、中、で、
森、の、か、ら、す、の、
た、が、ひ、の、す、が、
よ、び、か、は、し、て、
お、た、の、を、
た、が、み、つ、か、ら、な、い、で、

ある時

朝、靄、の、中、で
ゆ、き、あ、つ、た、の、は
し、つ、と、り、ぬ、れ、た、野、菜、車、さ
大、き、な、脊、な、か、の
め、ざ、め、た、ば、か、り、の
あ、か、ん、ぼ、さ

けふは、なんだか
いいことのありそうな気がする

ある時

松ばやしの上へは
とつても深い青空で
一ところ
大きな牡丹の花のようなところがある
こどもらの聲がきこえる
あ、なか、に、

う、ち、の、こ、ど、も、も、ゐ、る、ん、だ、な、

朝

なんといふ麗かな朝だらうよ
娘達の一塊がみちばたで
たちばなししてゐる
うれしそうにわらつてゐる
そこだけが
馬鹿に明るい

だれもかれもそこをとほるのが
まぶしそうにみえる

藤の花

ながながと藤の花が
深い空からぶらさがつてゐる
あんまり腹がへつてゐるので
わらふこともできないで
それを下から見あげてゐる
ゆらりとしてみる

ほんとに
食べたいような花だが
食べられるものでないから
寂しいんだ

ある時

ぼ、ば、ら、と、
雨、が、三、粒、

……け、ふ、は、何、日、だ、つ、け、な、あ、

ある時

木蓮の花が

ぼたりとおちた

まあ

なんといふ

明るい大きな音だつたらう

さようなら
さようなら

ある時

ほのぼのと
どこまで明るい海だらう
それでも濡れようとほせず
ちりり
ちりり
ちどりはちどりで

まつびるまを
鬼ごっこなんかしてゐる

野糞先生

かふもりが一本
地べたにつき刺されて
たつてゐる

だあれもゐない
どこかで

雲雀^{ひばり}が鳴いてゐる

ほんとにだれもゐないのか
首を廻してみると

ゐた、ゐた
いいところをみつけたもんだな
すぐ土手下の

あの新緑の
こんもりした灌木のかけだよ

ぐるりと尻をまくつて
しやがんで
こつちをみてゐる

手

し、つ、か、り、と、
に、ぎ、つ、て、ゐ、た、手、を、
ひ、ら、い、て、み、た、
ひ、ら、い、て、み、た、が、
な、ん、に、も、

なかつた

しつかりと

にぎらせたのも

さびしさである

それをまたひらかせたのも

さびしさである

ほうほう鳥

やつぱりほんとうの

ほうほう鳥であつたよ

ほうほう

ほうほう

こどもらのくちまねでもなかつた

山のおくの

山の聲であつたよ

★

ほう ほう

ほう ほう

山奥のほそみちで

自分もないてる

ほうほう鳥もないてる

★

自分がそこにもゐて

ふと鳴いてるとおもはれたよ

ほう ほう

ほう ほう

★

ほう ほう

ほう ほう

ほんとうのほうほう鳥より

自分のほうが

どうやら

うまく鳴いてゐる

あんまりうまく鳴かれるので

ほんとうのほうほう鳥は

ひっそりと

だまつてしまつた

まつぼっくり

山のおみやげ

まつぼっくり

ぼっくり

ころころ

ころげだせ

お晝餉^ひだよ
鐵瓶の下さたきつけろ

讀經

くさつばらで
野良犬に
自分は法華經をよんできかせた
蜻蛉^{とんぼ}もじつときいてゐた
だが犬めは
つまらないのか、感じたのか

尻尾もふつてはみせないで
そしてふらりと
どこへともなくいつてしまった

蚊 柱

蚊柱よ
蚊柱よ
おまへたちもそこで
その夕闇の中で
読経でもしてゐるのか
みんないつしよに

まあ、なんといふ莊嚴な

ある時

また^{ひび}蟬のなく頃となつた
かな かな
かな かな
どこかに
いい國があるんだ

ある時

松の葉がこぼれてゐる
どこやらに
一、すぢの
風の川がある

ある時

くもの巢に
松の落葉が
いい氣持そうに
ひつかかつてゐる
あ、びつくりした
晝、日中

ある時

とうもろこしの花が
つまらなそうにさいてゐる
あはははは
だれだ
わらつたりするのは
まつびるまの

砂つぼ島だ

ある時

宗、教、な、ど、と、い、ふ、も、の、は、
も、と、よ、り、な、い、の、だ、
ひ、よ、ろ、り、と、
天、を、さ、し、た、一、本、の、紫、苑、よ、

ある時

う、つ、と、り、と
野、糞、を、た、れ、な、が、ら
み、る、と、も、な、し、に
な、が、め、る、青、空、の、深、い、こ、と
な、ん、に、も、お、も、は、す
粟、畑、の、お、く、に、し、や、が、ん、で、ご、ら、ん

まつびるまだが
五日頃の月がでてゐる
びびびびび
びびびび
どこかに鶉がゐるな

ある時

こどもたちを
叱りつけてでもゐるのだらう
竹藪の上が
あさつばらから
明るくなつたり
暗くなつたりしてゐる

ほんとに冬の雀らである

ある時

まづしさを

よろこべ

よろこべ

冬のひなたの寒菊よ

ひとりぼつちの暮鳥よ、蠅よ

ある時

その聲でしみじみ

蝨斯、蝨斯

わたしは読んでもらひたいんだ

おまへ達もねむれないのか

わたしは

わたしは

あの好きな毗尼母經がよ

ある時

まよなか
尿せうべんに立つておもつたこと
まあ、いつみても
星の綺麗な
子どもらに
一掴みほしいの

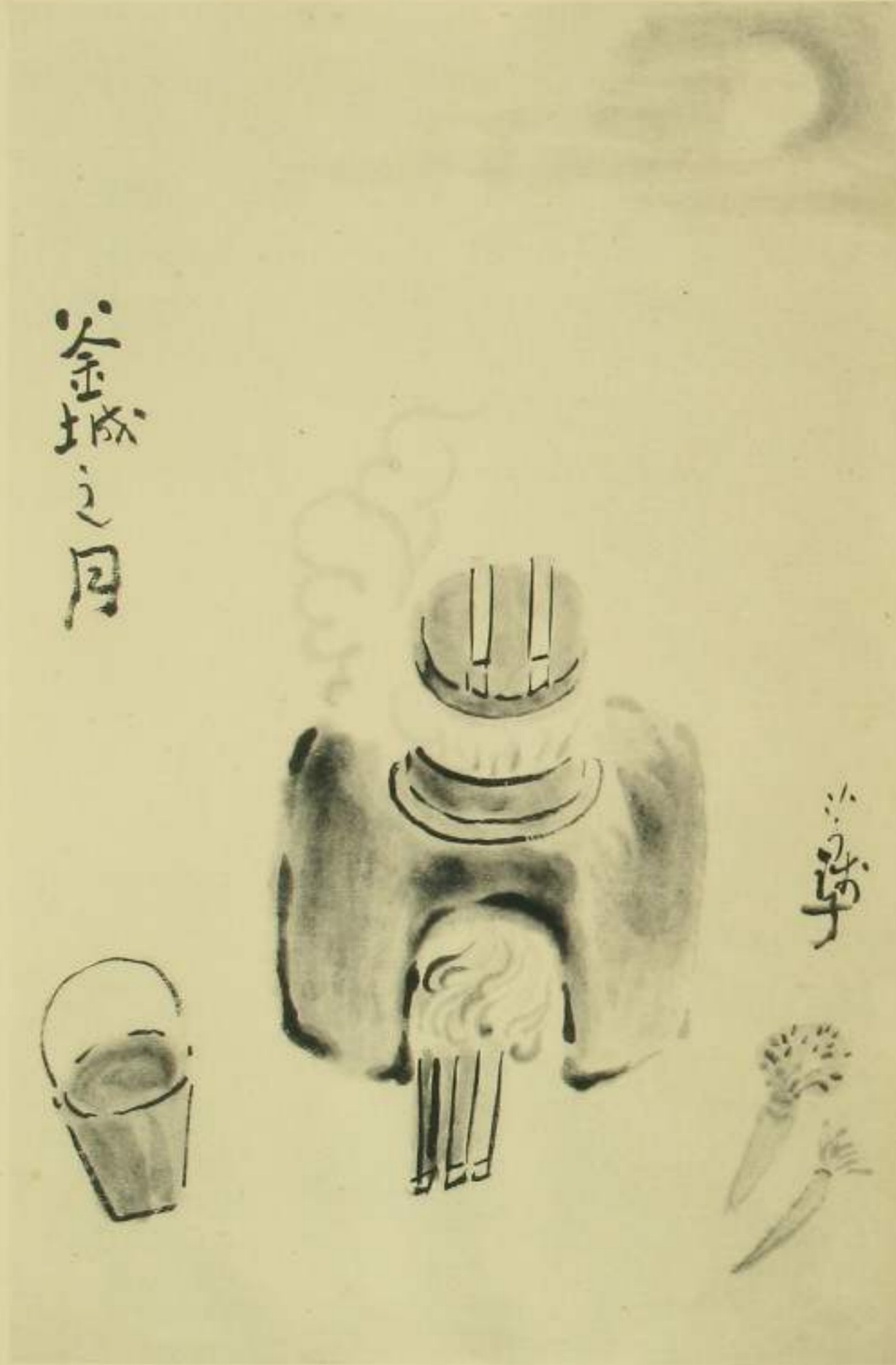
ふるさと

淙々として
天あまの川がながれてゐる
すつかり秋だ
とほく
とほく
豆粒まめつぶのようなふるさとだのう

いつともなく

い、つ、と、し、も、な、く、
め、つ、き、り、と、
う、れ、い、い、こ、と、も、な、く、な、り、
か、な、い、い、こ、と、も、な、く、な、つ、た、
そ、れ、に、し、て、も、野、菊、よ、
真、實、に、生、き、よ、う、と、す、る、こ、と、は、

か、う、も、寂、し、い、も、の、だ、ら、う、か、



釜城之月

子

ある時

沼の眞菰の
冬枯れである
むぐつちよに
ものをたづねよう
ほい
どこいったな

りんご

両手をどんなに
大きく大きく
ひろげても
かかえきれないこの氣持
林檎が一つ
日あたりどころがつてゐる

赤い林檎

林檎をしみじみみてゐると
だんだん自分も林檎になる

おなじく

ほら、ころがつた

赤い林檎がころがつた

な！

嘘嘘嘘

その嘘がいいぢやないか

おなじく

おや、おや

ほんとにころげでた

地震だ

地震だ

赤い林檎が逃げだした

りんどだつて

地震はきらひなんだよう、きつと

おなじく

林檎はどこにをかれても
うれしそうにまつ赤で
ころころと
ころがされても
怒りもせず
うれしさに

いよいよ
まつ赤に光りだす
それがさびしい

おなじく

娘達よ
さあ、にらめっこをしてごらん
このまつ赤な林檎と

おなじく

くちつけ

くちつけ

林檎をおそれろ

林檎にほれろ

おなじく

こどもよ

こどもよ

赤い林檎をたべたら

お美味^いかつたと

いつてやりな

おなじく

ど、う、し、た、ら、こ、れ、が、憎、め、る、か、
こ、の、ま、つ、赤、な、林、檜、が、……

おなじく

林檎はびくともしやしな
い
そのままくさつてしまへばとて

おなじく

ふみつぶされたら
ふみつぶされたところで
光つてゐる林檎さ

おなじく

こどもはいふ
赤い林檎のゆめをみた
いいゆめをみたもんだな
ほんとにいい
いつまでも
わすれないがいいよ

大人おとなになつてしまへば
もう二どと
そんないい夢は見られないんだ

おなじく

りんごあげよう
轉がせ
子どもよ
おまへころころ
林檎もころころ

おなじく

さびしい林檎と
遊んでおやり

おう、おう、よい子

おなじく

林檎といつしよに
ねんねしたからだよ
それで
わたしの頬つべも
すこし赤くなつたの
きつと、そうだよ

店頭にて

おう、おう、おう

ならんだ

ならんだ

日に焼けた

聖フランシス様のお顔が

すらりとならんだ

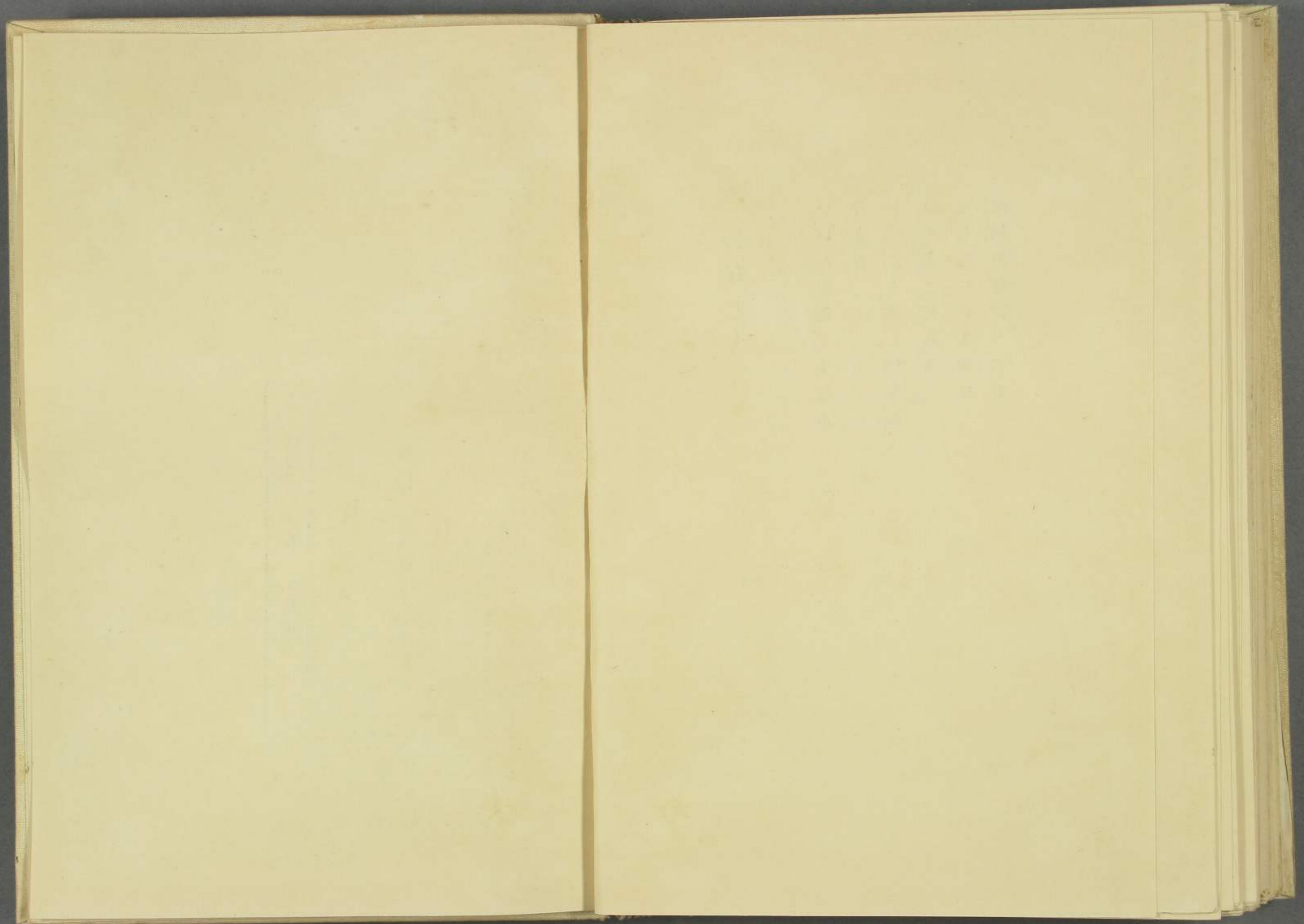
綺麗に列んだ

おなじく

錢で賣買されるには
あんまりにうつくしすぎる
店のおかみさん
こんなまつ赤な林檎だ
見も知らない人なんか
賣つてやりたくなくはありませんか

おなじく

いいお天気ですなあ
とまた
しばらくでしたなあ
おや、どこだらう
たしかにいまのは
榎楠（きぬぎ）の聲だつたが……



大正十三年十二月二十四日印刷
大正十四年一月一日發行

詩集 雲
定價壹圓八拾錢

著者 山村暮鳥

印刷者 高井能

發兌 東京市牛込區山伏町十四
イデア書院
振替東京一五四二三番
電話牛込 三六五六番

發賣元 東京慶文堂 名古屋川瀬書店
大阪金正堂 久留米菊竹書店

大杉印刷所

一、弊院の理想とその一切の純益は「教育の王國」實現のためにささげるのであります。

一、弊院は主として教育・哲學・藝術・道德・宗教及び兒童讀物に關するものを出版いたします。

一、小西重直先生を顧問とし小原國芳氏指導の下に其恩師先輩學友の作品を主として出版いたします。學界のために責任を重んじ、權威あるものにあらずれば出版いたしません。

一、落丁その他不備の點につきましては一切その責に任じます。

東京 イデア書院

